

# 茶の湯文化学会会報 No.37

第37号 / 2003年5月10日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270  
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314  
http://www.chanoyu-gakkai.jp e-mail chanoyu@oregano.ocn.ne.jp

## オペラ「TEA」を見て

影山純夫

二〇〇二年の一月二日と二四日の二日間、東京のサントリーホールで、オペラ「TEA」が演じられた。台本と作曲、指揮は中国の作曲家タン・ドゥン。演出はイギリス(?)のピエール・アウディ。それにハイジン・フーほか十四人の歌手が出演した。なお、このオペラには「茶経異聞」という副題が付いている。この演奏の模様は去年の一月NHKの教育放送でも放送されたので、ご覧になった方がおられるかもしれない。茶を題材にしたオペラということで筆者も二四日に出かけたので、簡単にその内容を紹介し感想を記しておきたい。

内容は、日本の元皇子で僧となった聖禱と中国の皇女蘭との愛と、陸羽の「茶経」を求めての物語で、三幕から成る。

第一幕には水と火という題が付いている。第一場は京都のある寺院。聖禱と九人の僧が茶を呑もうとするが茶碗は空。後方では巫女が茶を点てるような仕草をする。三人の打楽器奏者が水を叩きかき回し様々な水音をたてる。第二場は第一場から十年さかのぼった中国の長安。宮殿で芝居「猿王」が演じられている所へ聖禱が現れ、皇帝に蘭との結婚を申し込む。皇帝の「茶」

という出題に応じて見事な詩を作った聖禱は結婚を許される。その後千頭の馬と引き替えに「茶経」を求め、ペルシヤ人の出現に続き、中国の皇子と聖禱との「茶経」を巡る真贋のいい争いが始まる。打楽器奏者により水音と紙が風をはらむ音がたてられる。

第二幕には紙という題が付いている。聖禱と蘭は「茶経」を求めて陸羽のいる南に旅立つ。聖禱と蘭の二人を結びつけたのは茶。蘭は茶の伝説と茶の作られる過程を聖禱に教える。打楽器奏者によって紙が風をはらむ音や紙をくしゃくしゃにする音が、楽器奏者や歌手によって紙(楽譜など)を振る音がたてられる。

第三幕には陶器と石という題が付いている。第一場は南の地。陸羽の娘陸が茶を点てている。その儀式の最中に二人が現れ陸羽に会いに来たと言うが、陸は陸羽が死んだ事を告げる。聖禱が「茶経」を譲ってくれようように頼むと、初めは承知しなかつた陸も二人の愛に感じ、「茶経」を世界に広めることを条件に「茶経」を与える。突然現れた中国の皇子はそれを奪い取り、聖禱との間で争いが始まる。間に入った蘭は弟の皇子に刺され、その死によって聖禱と皇子との争いは終わる。打楽器奏者は陶器を打ち、歌手は石を打つ。第二

場は京都の茶庭。立ちつくす聖鬻と僧達。その後ろでは巫女が茶を点てるような仕事をしている。打楽器奏者によっておこされる風をはらむ紙の音と水の音。最後は一滴の水音で終わる。

中国、貴重な物を手に入れようとしての争い、それに女性の献身と、プッチーニのオペラ「トウランドット」の影響を感じさせるが、それはともかく、極めてメロデーも受け入れやすく、また変わった楽器(?)の使用もあり、楽しめる現代オペラであった。

このオペラで繰り返されるのは、碗は空だが、香りはただよい、影は消え去ったが、夢はふくらむという詞と

茶を育てるのは難しい、摘むのはもっと難しい、味わうのは最も難しい

という詞である。茶を飲む場面は何度かあるのであるが、いつも碗は空である。味わうのは最も難しいとし、碗は空ということ、茶の精神性を示そうとしているのであるが、茶を飲まない点には不満が残る。飲まないことには茶は始まらないのではないか。

このオペラでは、普通の楽器の外に水や紙や陶器、石などが使われている。紙は木から

生まれ、陶器は火や土から生まれると考えれば、普通の楽器の金属と合わせる木・火・土・金・水という万物生成の元素が全て使われていることになる。また土を地と考えれば地・水・火・風(紙のはためき)・空(空なる碗)という万物を構成する五大が示されているということもできる。極めて東洋的な思想が示されているのである。

聞いたときにはわからなかったが、台本を改めて見直すと、タン・ドゥンは茶と愛とを極めて深く関連づけていることに気づいた。だから二幕が重要な意味を持つのだが、愛の対象である蘭を失った聖鬻は結局は空の碗を傾けるしかなかったのかもしれない。

### 理事会

本年度第一回の理事会を四月二三日(日)二時から池坊短期大学第一会議室で開催した。参加理事は二名。会長挨拶に続き議事に入った。

事業報告については、日向理事の総会・大会報告に続き、中国での研究会について高橋副会長から、静岡での研究会について小泊副会長から報告があった。東京・近畿・東海・

話し合われた。認定方法については学生証のコピーを添付することとし、会則変更の文案を次回理事会に提示することになった。会誌の一般への販売について、最近の三号は一冊八〇〇円、それ以前の号は一冊二〇〇円とし、平成一六年度から実施することが決定された。国際交流等で会誌を持参する時は、会長の承認を得て寄贈扱いとすることが確認され、公共の研究機関等に会誌を寄贈する件について、理事にアンケートを取り寄贈先としてふさわしい所を推薦してもらうことになった。役員改選会長・副会長・参与・監事については再任することが承認され、理事については次回理事会までに具体案を考えることになった。

### 研究会

第一七回の研究会を中国の湖州市で開催した。その概要についてはすでに会報三六号に高橋副会長の報告があるので(参照願いたい。発表の内容は次の通り。

### 「茶道」考

倉澤洋

陸羽の茶法は、同時代人によって「茶道」と呼ばれた。この場合「茶道」は、単に「茶法」の言い換えとは考えにくい。なぜなら中国においては、古来、「道」は儒・仏・道にわたって極めて重要な思想用語であったからである。陸羽の同時代人が、彼の茶法を「茶道」と呼んだのは、その中に何らかの意味で儒・仏・道に比肩し得るような高度な精神性を認めていたからではなかったか。

日本茶道は、いわば中国茶道を母として生まれ、日本に渡って大きく成長した子供であると言えよう。世界史を大観すると、長きにわたって世界を主導した西洋に漸く驕りが生じ東洋の重味が増しつつある。そういう歴史の動きを勘案すれば、東洋文化の精華である茶道は、これからの世界文化の中で大きな役割をはたし、「世界文化の精華」となることができる筈である。茶道に関与する人は、実践的に関与する人も、学問的に関与する人も、茶道をそのような文化として守り育てていく責任があるであろう。

### 陸羽の青塘別業の再建の意義

董淑鐸

茶聖陸羽は、唐の上元初年(七六〇)以来、

高知の各例会についても各担当理事から報告があった。決算報告については、谷理事より今年度は会誌を発行できなかったこと、会員名簿を発行したことなど、資料に基づき報告があった。平成一五年度の総会・大会は五月三十一日と六月一日に池坊短期大学で開催すること及び講演や研究発表者について話し合われた。研究会は静岡や中国での開催が検討された。どちらも担当者で具体的な案を作成し、次回理事会に提案することになった。近畿例会は夏前と秋と年明けの三回を予定。東京例会は今年度から田中・竹内理事を中心に開催、初回を五月二四日に予定しており全部で六回の開催を予定。東海例会は四月二五日と六月二〇日の開催が決定しており、あと二回を予定。高知例会は検討中。いずれの例会についても、担当者が、より具体的な案を作成して次回理事会に提案することになった。

谷理事から平成一五年度予算案について説明があった。次回の会員名簿の発行は様子を見て対応することになった。決算報告書を予算と対比した形式にした方が良いのではという意見があり、来年度から変更することになった。その他学生会員の会費を半額にすることについて、会則の変更や学生の定義について

湖州に居を定め、貞元末年(八〇四)に湖州で死去したもので、その間一〇年にわたって江西の洪州や、上境や広州に移り住んだことを除けば、湖州に前後合わせて三〇年以上住んでいたことになり、湖州は彼の第二の故郷といえよう。湖州に於いて、陸羽は、世界最初の茶学の専門書たる『茶経』を始めとする業績を残したばかりでなく、彼の遺風と遺跡をも残したのである。青塘別業は、顔真卿や皎然等の援助によって建造された陸羽の住まいであり、『茶経』が最終的に完成し出版された場所であって、茶文化の歴史の上で、重要な意義を持つ。しかも、陸羽が老後を送った場所であるので、青塘別業の再建は、歴史上の重大な出来事であり、全世界の茶人達の共通の願いである。(湖州陸羽茶文化研究会会長)

### 五山文学に見る日中茶文化交流

高橋忠彦

日本では、中国の詩文を模倣して漢字で書かれた文学作品が、古くから作成されてきた。この漢詩文が質量ともに盛んに作られたのが、五山文学の時代(一二世紀後半から一六世紀)である。五山文学とは、鎌倉と京都の五山を

中心とする、臨濟宗の禅僧の詩文や語録の総称であるが、この時代の僧侶は、中国に渡って仏道を学んだものが多く、宋・元・明の文化を日本に伝える役割をになっていた。したがって、五山の漢詩文の中には、茶を扱ったものも見られ、当時の日本の茶文化と中国の茶文化双方を知るための資料となるばかりか、両者の交流の記録ともなっている。

五山文学に見る茶詩を拾い読みしていくと、茶文化が日本文化の一部として、次第に成熟した過程がうかがえるが、全体としては、中国の言葉に通暁し、古典としての唐宋の茶詩を下敷きに行っていることが確認される。そこで多く取り上げられたのは、盧仝の「茶歌（走筆謝孟諫議寄新茶）」の、茶を通じて超越した世界に心を遊ばせるという発想である。これは、禅の脱俗性と相通する面もあったであろう。

茶文化の時代的な変化をあえて論ずれば、最初は中国の聖地に結びつけられていた茶が、日本における禅僧の生活になじんでくる様子は想像しうる。そして、最終的に、生活の一部と化した茶は、日本的な文化に変化しつつも、精神面では、案外同時代の中国の文人的茶文化に近い面もあり、日中の文化的な交流

が緊密であったことをうかがわせるのである。

陸羽は如何にして儒士となったか

朱乃良

茶聖陸羽は、その思想の体系からいえば、中華の伝統文化の擁護者であり、儒教を尊崇した文人学者である。陸羽の在世当時から、この見方はほぼ定論となっていた。陸羽は子供の頃から寺院の中で育ったのであるから、仏教思想が必然的に彼に対して主導的な作用を及ぼしたはずである。しかし、彼はあくまでも仏教を信ぜず、儒教を尊崇した。その理由は歴史唯物主義の観点と、弁証法的方法で探求すれば明らかになる。

捨て子の陸羽は最初李冶の家で育てられたが、李冶の父は学識豊かな儒者であった。彼は陸羽に教育を施し儒教的教養を植え付けた。そのため龍蓋寺で生活しても陸羽は仏教へ馴染めなかったのである。その後陸羽の才能を認めた李斉物により火門山の鄒夫子の元に送られ、儒教の教育を受けた。時には陸羽は鄒夫子のために茶を採り茶を煮た。

火門山を下りた陸羽は、高名な文学者崔国輔と交わりを持つようになる。崔国輔の薫陶、指導、影響を受け、陸羽は詩文に上達し、そ

の名声も次第に大きくなる。

安史の乱により故郷を離れた陸羽は逃避行を続け、江南の多くの文人学士と知り合うことになる。その中には劉長卿、顔真卿、皎然が含まれていた。湖州に落ち着いた陸羽は二十九歳で『自伝』を著し『茶経』の初稿を完成した。すでに陸羽の儒教思想は確立し成熟に向かっていた。「而立の年」を迎えて後、陸羽は儒者の立場で多くの文人学士と交わり、輝かしい業績に満ちた黄金時代が始まった。

日本に於ける煎茶文化の始源に就いて

大槻幹郎

日本に於ける煎茶文化の本格的な始まりは、一七世紀の日中文化交流にある。この契機は、長崎唐人貿易を基盤に成立した長崎興福寺逸然性融等の招請により、一六五四年福建省副州府の黄檗山萬福寺隠元隆琦（一五九二～一六七三）が僧俗三〇名と渡来したことにある。一六六一年には、京都に近い宇治に同名の黄檗山萬福寺開山となり、随従の僧や弟子となった日本僧により黄檗禅の新教団が形成され発展する。

これが明末の臨濟禅のみならず、明清文化を中心に改めて広く中国文化の摂取を推進し、

煎茶も亦新しい茶として受容されて次第に広まり、一八世紀には盛行するに至る。

この端緒の事実は、隠元を始めとする黄檗僧の語録中に確認できる。煎茶は明代文人達に愛好され、居士仏教と呼ばれる禅僧との交流から禅院にも広まり、隠元らにより伝えられたことが認められる。この煎茶受容について、史料の一端を提示する。

茶と茶にあらざる「茶」

蔡一平

茶と名前に付くものうち、奶茶、花茶、酥油茶、午時茶、太上五神茶、清泉白石茶、は皆茶葉といくらかの関係を有している。しかし、それぞれの茶の含有量は異なるし、その製法もいろいろである。一方糖茶、菊花茶、夏枯草茶、金銀花茶、苦丁茶など各種の飲料にも、全て「茶」の字が含まれている。しかし、よく考えれば、それらは茶葉と縁もゆかりもない。多くの薬用飲料は、湯をかけて飲む形式であり、茶の飲み方と形式が同じだという理由だけで、「某々茶」と呼ばれているのである。このように見ると、国民の頭の中の発想において、また生活習慣において、「茶」の字は大変に親しまれやすく、また同

一視されやすいことがわかる。ここで一つの問題が生ずる。茶文化の研究において、このような、茶にあらざる「茶」をどう扱えばよいかということである。それを茶文化研究の範囲内に入れてよいであろうか、それとも茶文化の外に追い出すべきであろうか。これは深く検討すべき問題である。議論を引き出す役目を果たすために、私は以下の見方を提案し、大家の方々のご批判を仰ぎたい。

1. 茶にあらざる「茶」は、飲料業界で占める売り上げ額がさほど大きいものではないので、茶文化研究の主役の一つとなることはできず、せいぜい脇役として、手助けしたり、見守ったりする程度である。

2. しかし、我々は、茶にあらざる「茶」を茶文化の外に排斥する必要はない。それが茶文化を発展させ、豊富にする可能性があるからである。特に苦丁茶などは、茶の仲間の植物ではないが、確実な茶の代わりに飲用され、将来性が大きく、多くの茶業界の刊行物、出版物において、既に茶として扱われている。

3. 茶にあらざる「茶」も、茶文化界の関心を集めるべきであり、相応の研究が行われて、その位置が定められるべきである。しかし、主客が転倒して、正しい関係が失われ、識者

の物笑いになるようではいけない。（湖州陸羽茶文化研究会副会長）

『茶経』における茶の五官的な判断基準

顧 雯

『茶経・六之飲』の中で、「精飲」を實踐する際に「九難」（九ヶ所の難点）があると指摘されている。この九ヶ所は「精飲」のキーポイントとなり、飲茶の「妙」を体得するまでの難関である。この難関である「一日造。二日別。三日器。四日火。五日水。六日炙。七日末。八日煮。九日飲」に対して、陸羽は『茶経』の「一之源、二之具、三之造、四之器、五之煮」に述べてきたことをまとめるという形で、ここで再び最も忌避することを制定したのである。それは九つの「非ず」（…してはいけないこと）で示されている。

九つの「非ず」が『茶経』における茶の五官的な判断基準となる。茶の五官的な判断というものは、茶の芽と餅茶の形状、製茶・飲茶の過程における火や沸き水や茶の様子の変化などを視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚によって感じ判断することである。『茶経』では、茶摘みの芽の形状、餅茶の等級区分、製茶・飲茶における火の使い方、水の沸き具合、茶

を炙るとき餅茶の変化する様子などについて、熟練した視覚的な判断基準が出来上がっている。陸羽は茶湯の花・沫(ま)・餗(ぼ)の形に心酔したが、茶道具の形態や茶碗と茶湯の色の調和にも判断基準を設定し、香りが高く、甘味で、こくのある味についてまで、五官的な判断を完備させたのである。

『茶経』の製茶・飲茶の判断基準は、精緻な内容が美しい言葉によって描写されている。その描写には文学的な美・芸術的な香を感じさせるものがある。それは後代に影響を与え、現在でも中国の品茶芸術の一特徴となっている。

(財)小谷城郷土館蔵『茶づくり屏風』

小谷寛・曹建甫・森村健一

◎六曲一雙

◎製作年代：一七世紀

◎縦一七〇・七×横四九七・四cm

◎約八〇年前から続く小谷家に伝えられている屏風である。

◎茶の栽培から製造、そして壺につめ、茶を挽き、喫茶を楽しむ場面を描いている。構図は、中国であるが、日本で製作したものである。日本における茶の湯文化は、この屏風に

カで初めての企画でもあったので、表千家側からの参加者は、二人程であった。以下は、三日間の会議の内容の主な要点、特に日本の茶道の姿と違う点についてまとめたものである。

日本の伝統型かアメリカ文化適応型

今アメリカでは、大きく分けると、日本の伝統型とアメリカ文化適応型の二つに別れつつある様だ。アメリカ人であって日本で修行し、出張等で教えている教師達、或いは日本人及び日系の教師達で特に日本人の生徒が多い教師達は、日本の伝統を純粹に守っているという使命感がある。しかし、一方では、日本で学んだが、自分自身アメリカ人なので、現地の文化に適応させて行くのが自然の姿であって、日本には無い茶道の形を求めていきたいという考えの人々も増えている。しかしその形はどうであれ、茶の心は同じであるから、どれが良いか悪いかの問題ではないはずだという意見も当然起こってくる。カトリックのミサも元は、ラテン語であったが、各々の国の言葉に合わせて変わったし、禅やチベット仏教のお経もアメリカでは、英語になったし、茶道も人々の興味に答えていくには、多くの点で柔軟性を持たないと広まらないので

一つの流れとして見る事が出来る。

◎調査の目的(以下について中国研究者の御指導を賜りたい。)

①原画である中国では、いつの年代の屏風であるか？

②中国のどの地方の茶づくり、喫茶を描いているのか？

③現在この屏風と同じ屏風が中国で存在していないか？

④中国茶文化が日本における茶の湯文化を形成、確立させた事を知る屏風ではないか？



第一回アメリカ茶の湯会議報告(於サンタフェ市)

真理子・ラフレール

実際に北アメリカで茶道を教えている教師及び、茶道を学んでいる人々による初の茶の湯会議が、二〇〇〇年八月二日から約四日間に行われた。私は、一九八二年以来ロスアンゼルス、フィラデルフィアでお茶を教えているが、文化、歴史、環境の全く異なる国で茶道をするのは難しい。教師は、当然言語解釈に

はないだろうか。そんな疑問を多くの参加者が投げかけていた。三日間数多くの問題について討論したが、アメリカにおける茶道の多くの問題は、この「形と心」という大きな課題に繋がっていく様であった。

稽古場だけのお茶でなく生きたお茶とは？

どの教師も、稽古場だけのお茶でなく、薄茶・濃茶が一通り出来るようになったら、どんな形でもいいからまず茶会をしてみるように指導しているようだ。生きたお茶を体験すると稽古にも励みが出るし、又お茶を知らない人に説明しなくてはならない。その時に何を伝える事が出来るかは、チャレンジでもあるからだ。元々パーティ好きで、あまり体裁にこだわらない国民であるのかもしれないし、又日本のように人と会うのは、喫茶店というのでなく、気軽に人を家に招くからであるうか、機会さえあれば、茶会や茶事をする生徒が多い。日本では、茶室や良い道具が無いとなかなか茶会や茶事が出来ないと考えられるので教師や教習者、或いは、茶道具商等が茶会を催すというのが通念である。日本では、生徒が度々茶会に出席する事により、茶会の催し方を学び道具を鑑賞する機会を持つ。

まつわる問題や文化や習慣の違いに対処しなければならぬし、茶道具、茶菓子の原料、茶花などは現地にあるもので工夫していかなくてはならない。茶道の長い伝統、そしてその精神を崩さずいかにしてアメリカの文化に適応させていくかで教師達は、日々暗中模索しているのである。以前からアメリカでの茶道の問題点、又は情報交換や、意見の交流が必要であると教師達の間で話し合われていたが、いざとなると適当な場所や、時期を決めるのが難しくなかなか実現出来なかった。広いアメリカでの事、東海岸からは、サンタフェまで約六時間もかかるので、当然ながら西海岸からの参加者が多かったが、それでも、ベルギー、ニュージーランド、及び日本からの参加者も含み、会議企画者達の予想を遙かに超え総計四一ともなった。日本で長く茶道の修行をした教師、又、日本では、習わずアメリカで学んだ教師等それぞれの茶道経験も、様々であった。日本人及び日系人の参加者は六人のみで、日系以外の茶道人口がいかに増えているかを目のあたりにした様であった。アメリカでは、流派を問わず茶道を学んでいる人達の交流がさかんになって来た。今回はたまたま主催者側が裏千家であり、又アメリカ

一方アメリカの場合は、道具よりも、茶を分かち合うのが主旨となる。アメリカには日本の様な国民的年中行事があまりない。従って日本のように、三月のお茶の越前は、どこもかしこも雑祭りというようなことはまずない。必然的にお茶会は、個人の個性と創造性に依るものになるのであるが、道具の取り合わせや趣向が「お茶的」でない場合がでてくる。お茶的な趣向というのは、日本的な取り合わせでもあるので、日本へ行ったことのない生徒に、茶の美学をどの様に教えていくか難しい。

教師自身の稽古

アメリカでは自分の住んでいる地域にお茶の教師が誰もいない場合、本人がまだ教える資格を持っていないでも自ら教師にならざるをえない例が多くある。しかし、教えても、略益点前或いは、薄茶で終わってしまう生徒も多いので、所謂「上の点前」を忘れてしまいう。海外にいくと日本に行くことさえ難しくなる事がある。教師達がどの様に勉強を続けていくかも考えなければならぬ。日本では当然資格が無いと教える事は出来ないし、又実際に教えていても自分の先生との稽古は続けられ、美術館、茶室、茶庭、茶道講座等、

勉強するには、事欠かない。茶の技術だけではなく、先生から「師の茶」を習うという觀念が有り、それに依つてさらに自己を磨いていかなければならない。又、「先生の社中」という組織があり、先生だけでなく先輩からも学んで行く。しかしアメリカに、日本のようにいったんある教師に習い始めたら簡単に教師を渡り歩く事は出来ないという伝統を持ち込む事は難しい様だ。「それは日本の伝統的なシステムであつて、アメリカでは、茶の技をまず学ばなくてはならないのであるし、もっと民主的に、自由に数多くの教師から学ぶのがアメリカのシステムである。他の稽古場を自由に訪ね情報を交換し合った方がいいのではないか」という意見が圧倒的であつた。それに対して、西海岸の日本人の教師に習っている人達は、「その様な考え方は、当然日本人の教師達には、受け入れられにくいのではないか」と悲観的であつた。特に教師が日本語でしか教えない場合、言語の問題で、生徒が先生の言わんとする意味を把握出来ない場合が多い。「その様な時、英語で話す教師に習いたいのだが、それが出来ずに残念である」と言つていた。

#### 茶の精神性

の皮が付いていない等、茶人としての不満を挙げればきりが無い。将来アメリカで炭を作りたいという人が現れるといいのであるが。さてお茶の栽培はこの州が抹茶の栽培に適しているのだろうか等と、アメリカの炭で湯を沸かしアメリカ産の抹茶を飲む日が来る事を全員心から期待している様だ。

#### アメリカ茶道の行方―結びに代えて

その他の議題として、お茶をどの様に広めて行くか、お茶のデモンストレーションの問題点、大学での茶道講座等を話合つた。又茶菓子の実習、蓋置の製作もあつた。時間の関係で討議出来なかつた問題もあつたが、今回の会議は、初めての試みとして大成功であつたと思う。「アメリカの茶道は、まさに歩方を覚え始めた子供が誰にも頼らずやつと一人歩きし始めた様なものだ」と参加者の一人がいったようにアメリカの茶道は、一歩一歩確実に歩き始めたのである。「茶道は日本人にしか解らない特殊な芸道、茶道の教師は、当然日本人でなければならぬ」等の閉鎖的な概念を持つた在邦人の多い西海岸の茶道界のなかで教えているアメリカ人の教師は、「アメリカ人としてその様な環境でお茶を教えるには、とにかくも忍耐であつて、自分に自信

茶の精神は言葉で伝える事は難しいのでそれをどの様に示していったらいいのかという討議では、軸の問題がでた。利休は、「掛け物ほど第一の道具はなし」と言つたが、アメリカにもマーク・トウェインのような哲学者が、軸に出来るような含蓄のある言葉を残している。そういった哲学者なりの言葉を軸に使つても良いだろうかという質問が出た。それに対して賛成する人もあつたが、「そういった言葉の内容は素晴らしく軸にふさわしいと思うが、英語で書かれたものは、当然アメリカ人にはすぐ読めて解り易いのであるが、言葉で表現されすぎるきらいがある。それに対して、墨跡の特徴は、筆の運び、余白の面白さがあり、筆者の人格が偲ばれやすく味わいがある」と言う意見が多かつた。又軸に対して一札する意味合いも変わつてくる。「墨跡に一札する場合、禅の修行者である筆者に対しての一札という意味も含まれるのだが、英語で書かれた場合、筆者がごく一般のアメリカ人と言う事もありえる。その場合、軸に対する一札の意味も当然変わつてくるのではないか」と言う質問もでた。

#### 良い教師となる為の基準

日本の芸道の教え方は、「見て覚える」或

を持つてやつていけば、いつかはそれが実る日が来る」と述べていた。その言葉は、二〇年程の長い間、偏見と戦つて来た人の自信に満ちていた。アメリカの茶人達は、「日本の茶」を掲げ、それを競う在邦人達の作つている茶道界を客観的且批判的に見つめている。

「アメリカのお茶は、それが将来どの様な方向に進むかのガイドラインは、全く無いのだが、形や技術はともあれ、茶道の純粋な精神だけは、守り通さねばならない。これからも色々な形の茶道が出て来るかもしれないが、一番重要なのは、常に話し合いをし、互いに学び合つて理解して行く事である。お茶をもつと広め、アメリカの社会の為にも貢献出来れば良い」というのが全体としての意見であつた。「常に話し合いを！」これは、アメリカに脈々と伝わる民主主義の結核である。この精神が健全である限り、茶の湯の精神も受け継がれて行くに違いない。会議の締めくくりである茶会は、和やかであつたが、大変象徴的な茶会でもあつた。床には、参加者の一人であつたペダイン大学の教授が色紙に書いた「無二」が掛けられ、まず過去総てのお茶に携わつた人々に対しての一椀が床に供えられた。さらにこれからの将来の茶道として、も

いは、「いちいち聞かずに目で盗め」という勉強方法が強調され、稽古中に教師と生徒が討論するという方法は取られない。教師の地位は、絶対であり、生徒も反論は避ける。しかしアメリカの教育方法は、教師も生徒も意見を述べ合うという点では、両者は対等な立場にある。それは茶道教育の場でも変わりがない様だ。「生徒の経歴、茶道を習う目的、進歩の状態も各々違うので、教師が生徒に、教師自身の考えを押し付けるのではなく生徒自らが答を出すように指導する。その際、所謂日本的な、だめ、だめ、と言う否定的な態度でなく、肯定的且建設的に忍耐強く生徒に自信を持たせるよう指導して行く方が良い。生徒の質問に誠意を持って答えるというのが良い教師となる為の第一の条件」として挙げられた。

#### アメリカで入手出来るもの

#### 情報交換資料の作成

今回熱心に検討されたのは、炭の入手とお茶の栽培であつた。お茶に使う炭は、日本でも高値になつて来ているので、ましてそれを輸入するとなるとさらに高くなる。パーベキュー用のメキシコの炭があるが、形や臭いの点で問題もあるし、韓国の炭も出て来ているが炭

う一椀には、お茶の粉だけで湯が入っていない茶碗が供えられた。「我々の茶道への煮えだぎつた熱い思いで将来のお茶を点てよう」という意味だという。茶杓銘は、「初花」であつた。参加者の一人が京都の北野神社の骨董市で見つけたものだという。その名の様に、まさにアメリカで最初に力強く咲いた「茶の湯の会議」であつた。この会議に参加してみても「自分だけがアメリカの社会で孤独ではない。お互いの苦勞を分かち合い助け合う繋がりが出来た」と言う実感が誰にでもあつたのだらうと思う。それが、会議が成功した理由の大きな部分であつたに違いない。今回の会議はニューヨーク州にある大菩薩禅堂金剛寺で今年六月に行われる予定である。流派に関係なくアメリカの茶道に関心のある人々の参加を募っている。私にとつてもどの様な話し合いがおこなわれるか大変楽しみである。

#### 例会のご案内

#### 東京例会

次の通り開催します。どちらでも会場は東京芸術大学（東京都台東区上野公園）です。

○五月二四日（土）午後二時

林間茶の湯について  
 中村修也氏

○六月二十八日(土) 午後二時〜  
 土屋相模守政直と茶の湯 木塚久仁子氏  
 煎茶と印材鑑賞(仮) 小林優子氏

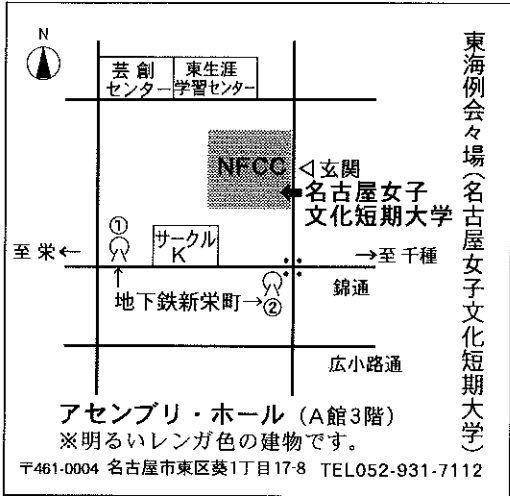
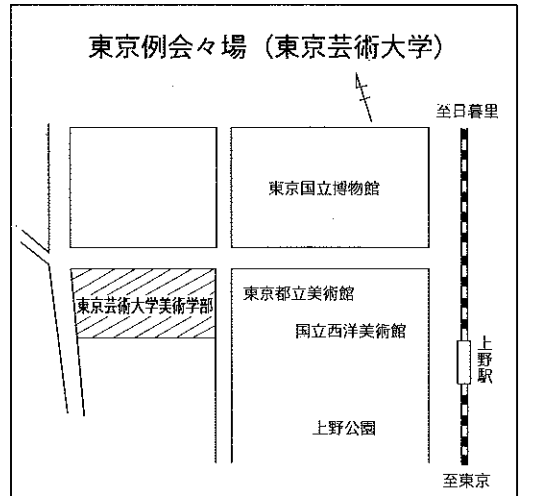
○七月二十六日(土) 午後二時〜  
 『利休百会記』の文献学的研究の射程  
 矢野環氏

東海例会  
 第六回例会を次の日程で開催します。会場は名古屋市東区の名古屋女子文化短期大学アセンブリホールです。

○六月二〇日(金) 午後六時〜  
 題未定 筒井絢一氏

○七月二六日(土) 午後二時〜  
 題未定 高取友仙窟氏

近畿例会  
 次の日程で開催します。会場は京都市下京区の池坊短期大学です。  
 ○七月二六日(土) 午後二時〜  
 「移築」から見た近代の茶室 桐浴邦夫氏  
 近代の数寄屋師について 松本康隆氏



会員名簿訂正

- 一二頁 佐藤美智子さんの電話番号  
 ○三・三四〇〇・三四八八(誤)  
 ○三・三四〇〇・四三八八(正)

後記

\*一月の研究会の発表の概要を掲載する予定でしたが、紙数の都合上次号にまわさせていただきます。申し訳ありません。  
 \*既にお手元に案内が届いていると思いますが、総会・大会が迫っています。参加をお待ちしています。